

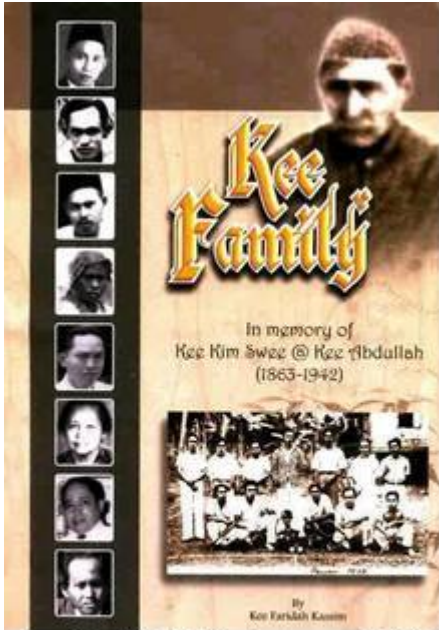
知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

タワウにおけるキー (Kee) 一族とマレー民族協会

伊藤眞 (東京都立大学名誉教授)



2011年に出版されたキー・ファリダ編「キー・ファミリー」の表紙。右上に北ボルネオ会社勤務時代のキー・アブドゥラが写っている (筆者提供)

タワウの「キー一族」について述べたい。旧聞に属するが2011年、サバ州の南東部にあるタワウの市民ギャラリーでキー一族の写真展が開催された。それを伝える地元紙の記事には、「タワウの歴史はキー一族の歴史と同義語である」というキャプションが付けられていた。

それまでインドネシアからのブギス移民を追跡調査し、彼らから

たびたびタワウにおけるブギス移民の中心的役割について聞かされていた筆者にとって、タワウにおけるキー一族の重要性を再認識させられる機会となった。

この写真展と合わせて、「キー・ファミリー」(キー・ファリダ編)が刊行された。写真満載の家族譜で、同書からキー一族の創始者であるキー・キム・スウィ氏(1863~1942年)について知ることができる。キー・キム・スウィ氏はラブアン生まれ、父は海南人、母はドゥスン人であった。20歳の時、サンダカン(現サバ州)に向かう途中、船が遭難したがスルー人によって救助される。

それが縁でイスラム教徒(ムスリム)の村で暮らし、イスラムの教えを知る。1894年、北ボルネオ会社に採用され、タワウに開設された同社支店に税収吏として配属される。翌年にはスルー出身の名門の娘と結婚、これを機に彼はキー・アブドゥラと名乗るようになる。

その当時、北ボルネオ政府からタワウの原住民首長を任せられていたのは、入植者のリーダーであるブギス人プアドだった。キー・アブドゥラの結婚に際しては、プアドが花嫁の養父として立ち会った。その花嫁は多産に恵まれ、子どもの数人はプアドなどブギスの有力者の子弟と婚姻関係で結ばれた。

キー一族の拡大はキー姓を父系的に継承しつつ、タワウにおけるイスラムの中心的な役割を堅持し続けたことにあると言っていいだろう。キー・アブドゥラは1920年代に北ボルネオ会社を退職すると、タワウで初となる住民代表としての「オラン・カヤカヤ」(OKK)の称号を与えられる。

次のOKKの地位は三男のキー・アブバカル(在位1937~52年)が継承する。彼は、1936年には「タワウ・マレー民族協会」の前身となる「タワウ・ムラユ文通友の会」を、1938年には「タワウ・マレー民族協会」を組織し会長に就いた。戦時中の停滞を経て1946年に同協会を再興させた。第2代会長になったのもアブドゥラの娘を母に持ち、かつプアドの孫である人物だった。

タワウ・マレー民族協会のメンバーには、半島出身のマレー人はほとんどおらず、ムスリム華人、ブギス、ジャワ、バンジャール、ブルネイ、ティドン、スルー、さらにパキスタン系、インド系住民などであり、また彼らの混血であった。彼らをつなぐのは、ムスリムとしての一体性であった。

同協会は、その後、一時的に「タワウ・イスラム協会」に統合されるが、しばらくして「タワウ・マレー社会協会」と改名して復活する。そこに見られるのは、漠然とした民族のカテゴリーとしての「マレー人」というよりも、多様性と包括性を具現化した意味における「マレー人」である。その包括性を可能にしたのは、絶えず外来者を受け入れてきたタワウの境域的な土地柄も大きい。キー一族の寄与を忘れてはならないだろう。

< 筆者紹介 >

1950年横浜生まれ。専門は社会人類学。1982年に東京都立大学社会科学部単位取得退学。博士(社会人類学)。現在、東京都立大学名誉教授。インドネシア、マレーシアでは人の移動、高齢化、ジェンダーに関わる調査に従事。また、ブギス族の「イ・ラガリゴ英雄叙事詩」分析に関心を持つ。最近の共著書に「東南アジアにおけるケアの潜在力」(京都大学学術出版会、2019年)、「工業団地がやってきた」(風響社、2023年)など。